２　熱田神宮等に見られる歴史的風致

熱田は、名古屋台地南部の熱田台地南端に位置し、かつては眼下に伊勢湾を望む風光明媚な場所であった。古墳時代、この地には、尾張・美濃にかけて一大勢力を誇った尾張氏が断夫山古墳を築き、以後、古代・中世にかけて尾張南部における一大拠点として栄えた。古くから熱田神宮の門前町であった熱田には、神官や社を支える人々などが住み、伊勢湾の豊かな恵みを享受しながら、町場を形成していった。町の発展とともに、民衆の力も蓄積され、中世には南新宮社（みなみしんぐうしゃ）の祭りに合わせて、大山や車楽（だんじり）といった山車を出す華やかな祭りが行われるようになった。

熱田の町は、中世末期には、織田信秀・信長の庇護を受け、近世には、東海道の宿場町が置かれて多くの人々で賑わった。名古屋城下町とは本町通（熱田みち）で結ばれ、熱田の町の範囲は徐々に広がっていったが、明治時代に至るまで、熱田は城下町とは一線を画した独自の発展を続けた。明治 40 年（1907）、名古屋港の築港を契機に、熱田は名古屋市と合併し、以後、城下町であった地域とともに名古屋市における二大拠点として、大都市名古屋の形成に影響を与えた。

このような熱田において、古代から連綿と熱田の町とともに存在し、今もこの地に歴史的な風情を残しているのが熱田神宮である。

熱田神宮（あつたじんぐう）は熱田台地の南端に位置し、草薙（くさなぎ）の剣（つるぎ）をご神体とする熱田大神（あつたのおおかみ）を主祭神として祀（まつ）り、草薙の剣にゆかりの深い五座の神を相殿（あいどの）として祀（まつ）っている。その歴史は古代にまでさかのぼり、境内では長い伝統をもつ神事が続けられている。

写真 2-26 初詣の賑わい

熱田神宮は名古屋市民をはじめ多くの人々の崇敬を集め、特に新年の初詣には多くの人々が参拝に訪れる。また、結婚式や七五三など、人生のハレの場として熱田神宮を訪れる人も多く、年間の参拝客は約 650 万人にのぼる。

熱田神宮の創祀（そうし）については、次のような物語が伝えられている。

『古事記』や『日本書紀』の物語によると、第 12 代景行（けいこう）天皇の皇子日本武尊（やまとたけるのみこと）は東征の際、伊勢神宮に立ち寄って三種の神器の一つ天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を拝受した。駿河の国においては神剣の力をもって受難を免れ、以後草薙の剣と称したという。東征の帰途、日本武尊は尾張国造（おわりくにのみやつこ）家においてその女（むすめ）の宮簀媛命（みやすひめのみこと）を妃とした。さらに伊吹山に向うに際して剣を妃の許に留め置いたが、都に帰る途中

に伊勢能褒野で亡くなった。その後、剣は宮簀媛命によって熱田の地に奉斎された。これが熱田神宮のはじまりと伝えられている。

一方、熱田神宮に関する古い記録としては、天武天皇の時代に宮廷に留め置かれた草薙の剣が朱鳥元年（686）、熱田に還座したことをうけて、『尾張国熱田太神宮縁記』には「それより以来、始めて社の守りとして七人を置き一人を長となし六人を列となす」と記されており、この時代に神社の神職制度が整えられたことが伝えられている。

熱田神宮には、本宮のほかに別宮、摂社、末社が計 44 あり、このうち４つの摂社と 12 の末社が熱田神宮の境外にある。これらの神社では、熱田神宮により神事等が行われているが、それぞれの地域に根付き、祭りなどを通して地域住民に親しまれている神社も少なくない。

また、熱田神宮から数百メートルの熱田台地上には断夫山古墳（史跡）や白鳥古墳といった古墳がある。これらの古墳には、熱田神宮創始の神話にちなむ伝承があるとともに、考古学的な観点からも熱田神宮との関連性が推測されている。

（１）熱田神宮境内における伝統行事

熱田神宮の境内は約 19 万㎡の広さがあり、その社叢は神苑であると同時に、尾張地方における数少ない常緑広葉樹林のひとつである。境内には本宮をはじめ、別宮１社、摂社８社、末社 19 社が祀られている。

境内の歴史的建造物としては、貞享３年（1686）に新造、修造されたという清雪門、南新宮社本殿、西楽所がある。この他、記念碑・石造物としては、織田信長が桶狭間の戦いに大勝したお礼に寄進したとされる信長塀、信長に仕えた御器所城主佐久間盛次の四男大膳亮勝之が寄進した佐久間灯籠（高さ 7.44 m、寛永７年（1630）庚午５月寄進）、永正 10 年（1513）あるいは 12 年に新造されたという二十五丁橋などがある。また、境内に移築され、保存・活用されている建造物には、旧名古屋博物館品評所の龍影閣や合掌造の原形ともいわれる又兵衛（いずれも登録有形文化財）などがある。なお、戦前には、正門（南門）の海蔵門（西楽所の南辺り）と西門の鎮皇門が国宝に指定されていたが、惜しくも戦災で焼失した。

熱田神宮の社殿は、古代から造営が繰り返されてきたことが様々な史料から明らかになっている。『熱田大神鎮座記』には、朱鳥元年（686）に天武天皇の勅命によって神剣が熱田に還座された際、改めて大宮や別宮諸神社を造営したことが記されている。また、室町時代には足利義持、義政、義稙の各将軍が造

営を行った。元亀２年（1571）には織田信長が修造し、海蔵門を新造したとされる。天正 19 年（1591）には豊臣秀吉が、慶長５年（1600）には徳川家康がそれぞれ修理を行い、慶長の修理の際には西門である鎮皇門が造営された。

しかし、徳川家康の造営後、17 世紀中頃には境内が荒廃した。この様子は松尾芭蕉の「野ざらし紀行」にも、「社頭大に破れ築地はたふれて草むらにかくる。…」などと記されている。これについて、当時の大宮司などは、幕府に対して造営修復の請願を続け、貞享（じょうきょう）３年（1686）、５代将軍綱吉によって修造が実現した。清雪門、南新宮社本殿、西楽所など、現在、戦災を免れて熱田神宮に残る建物の多くはこのときに新造、修造したものとされる。

図 2-14 「熱田神宮古絵図」文化５年（1808）
（享禄２年（1529）頃に描かれた古図を模写したもの）

明治 26 年（1893）、熱田神宮の社殿は、伊勢神宮にならって従来の尾張造から神明造に改められた。その後、大正、昭和初期にかけて大規模な造営が行われ、本宮をはじめ別宮摂末社に至るまで修築がなされるとともに境内の拡張整備が行われた。しかしながら、これらの旧社殿は太平洋戦争でほとんどが焼失してしまった。

戦後の造営は昭和 24 年（1949）から始まり、拝殿、勅使館、本殿などが順次整備された。本殿には、昭和 29 年（1954）５月に伊勢神宮内宮の古正殿が譲渡されることが決定され、昭和 30 年（1955）11 月 11 日には本宮遷座祭が行われた。戦後の造営は昭和 50 年代まで続き、摂末社や文化諸施設、広場などが整備されて、ほぼ現在の姿となった。平成 21 年（2009）に修造が行われ現在に至る。

写真 2-27 現在の熱田神宮（中央奥が本殿）

熱田神宮境内への主要な入口は、南門（正門)、東門、西門の３つである。各門には鳥居が立つ。境内のほぼ中央に第二鳥居と手水舎があり、それぞれの門から入ってきた参拝者はここでひとつとなり、本宮へ向かう。手水舎のすぐ北側には、樹齢千年といわれる大楠があり、参拝者を迎える。境内にはこの他にもクスノキの大木が各所に見られる。

この他境内の諸施設としては、例祭に勅使をお迎えする勅使館、神符守札授与所を併設する神楽殿、祈祷殿、斎館、会館などは、各種の神事・祭典や行事に使用される。文化殿には熱田神宮宝物館や熱田文庫などが入る。熱田神宮宝物館は、博物館として登録されており、学芸員を置いて特別展や平常展を行っている。また、境内には６軒の茶席があり、毎月 15 日の月次茶会に利用されている。

茶室「蓬庵」
（写真提供：熱田神宮）

写真 2-28 熱田の杜

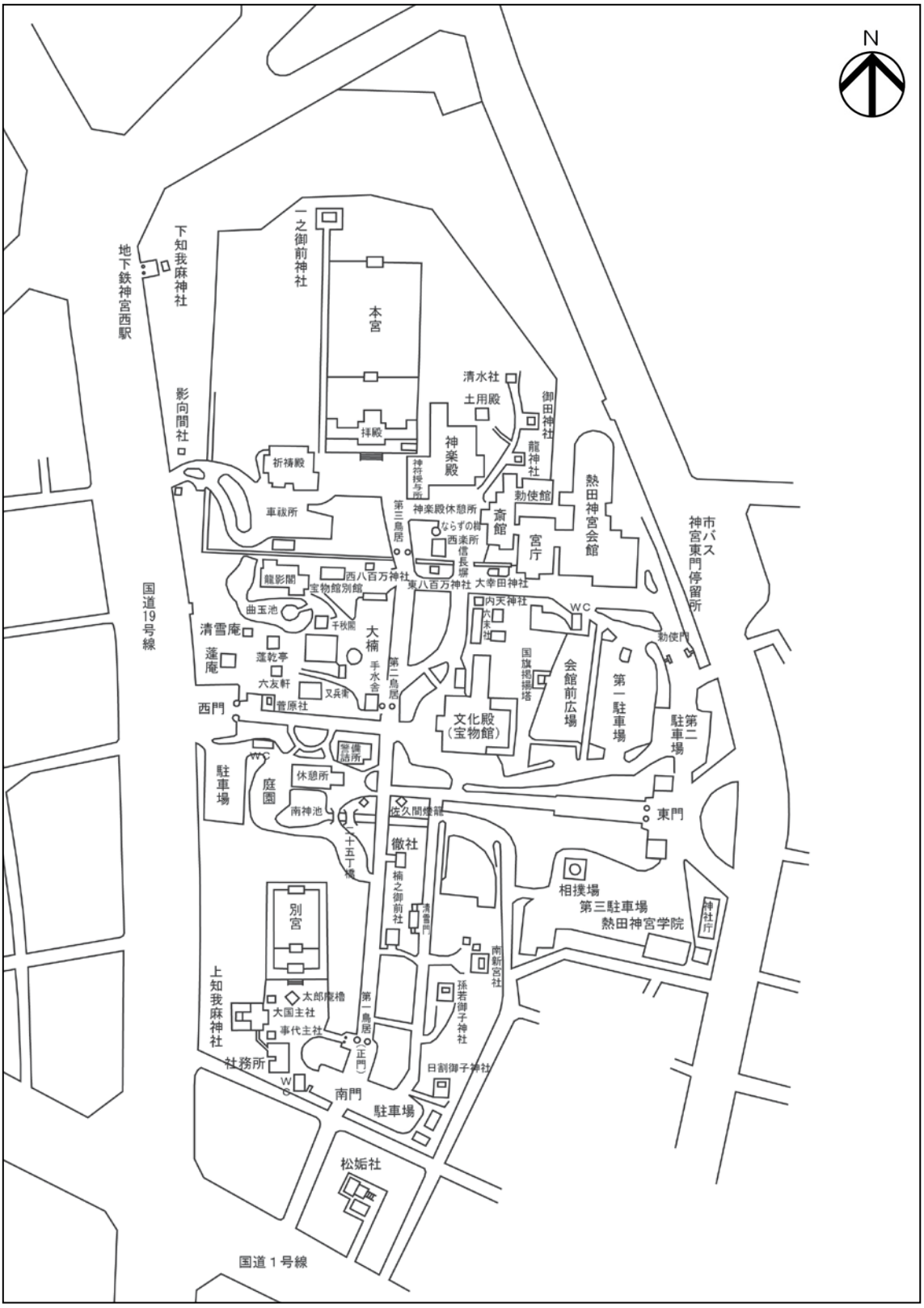

図 2-15 現在の熱田神宮配置図

ア　草薙の剣にちなむ特殊神事

酔笑人神事はオホホ祭ともいい、5月4日の夜に行われる。天智天皇7年(668)に新羅の法師道行により盗み出されたとされる草薙の剣が朱鳥元年（686）に熱田の地に還座し、社中がこぞって歓喜笑楽したその様子を伝えるものといわれる。『文明十七年（1485）年中行事』の5月4日に「酔人御神事、色々儀式有」の記述があり、この頃には神事が行われていたことがわかる。

酔笑人神事は、見てはならぬと伝えられる神面を、袖に隠し持った神官が境内を巡り、決められた場所で大笑いする神事で、祝詞も神饌もない特殊な神事である。この神事には16人の神官が参加する。衣装は立烏帽子に狩衣姿で、右手に笏をもつ。神事では、神面を影向間社で袖の中へ受け取り、神楽殿前、八剣宮を巡った後、清雪門で返納する。

まだ明るさの残る午後7時、16人の祭員は一列に並んで授与所南にある祓所へ進む。そこで修祓の後、影向間社に参進する。

影向間社に到着すると、祭員は笛役から神面を受け取る。面が祭員にわたり準備が整うと面役と呼ばれる2人は神前へ進み出て蹲踞し、まず正面を向く。祭員は、笛役を中心に内側を向いて半円陣状に立ち並ぶ。社殿に向かって右側の面役は、左袖に隠し持った神面を右手に持った中啓（扇の一種）で、3回叩いて「オホ」と言い、今度は左の面役が面を3回叩いて「オホ」と言い、また右の面役が左袖の面を三回叩いて「オホ」と言う。つぎに面役は向き合って先程と同様に右・左・右の順で左袖の面を3回叩き「オホ」と言う。面役の所作が終わり、笛役が「ターロリー」と笛を吹くと、祭員全員がそろって大声で笑う。これを3回行うと影向間社の行事は終わる。祭員は左袖に神面を入れているので、左手を胸前にあて、列を正して影向間社を後にする。

写真 2-29 酔笑人神事の様子

（写真提供：熱田神宮）

影向間社を後にした祭員は、神楽殿前まで戻っていく。神楽殿前に到着すると直ちに面役が正面へ進み出て、祭員も所定の位置に並び、影向間社と同様な所作を行う。神楽殿前での酔笑人神事が終わると次は八剣宮に向かう。3番目の場所となる八剣宮でも先の2カ所と同様の所作で大笑いする。

最後に東面している清雪門へ祭員が到着すると、南北一列に並ぶ。ここでは門に向って左側の面役だけが、正面に進み蹲踞する。面役は、正面を向いて左

袖の神面を３回叩き「オホ」と言い、これを３回繰り返して、笛役が「ターロリー」と笛を吹いた後、西を向いた祭員は大きな声で全員が笑う。ここでも３回大笑いをする。

大笑いが終わると笛役が神面筥（はこ）の前に進んで蹲踞し、順に祭員から神面を受け取って筥（はこ）の中へ納めるのである。その蓋を閉じると祭員は列を整え、参道を通って斎館まで戻り行事は終わる。

最後に大笑いが行われる清雪門は、末社楠御前社（まつしゃくすのみまえ）の北東にあり、もと別宮（べつぐう）の東門、本宮の北門とも伝える。両袖には築地塀が一部残っている。俗に「不開門（あかずのもん）」といわれ、何百年来かたく閉ざされたままとされる。天智天皇７年（668）に新羅の僧が神剣を盗んだとき通った不吉の門とも、神剣還座の際に門を閉ざして再び皇居へ移ることのないようにしたとも伝える。清雪門は、昭和 38 年（1963）年に解体修理が行われ、屋根の桁受皿斗（けたうけさらと）に「貞享（じょうきょう）三年（1686）寅六月十七日、遠州浜松浅原庄右衛門（あさはらしょうえもん）」とある墨書が発見されている。浅原は貞享の修理の時の大工の名である。清雪門は、戦災を逃れて残った数少ない建造物のひとつである。

写真 2-30 清雪門

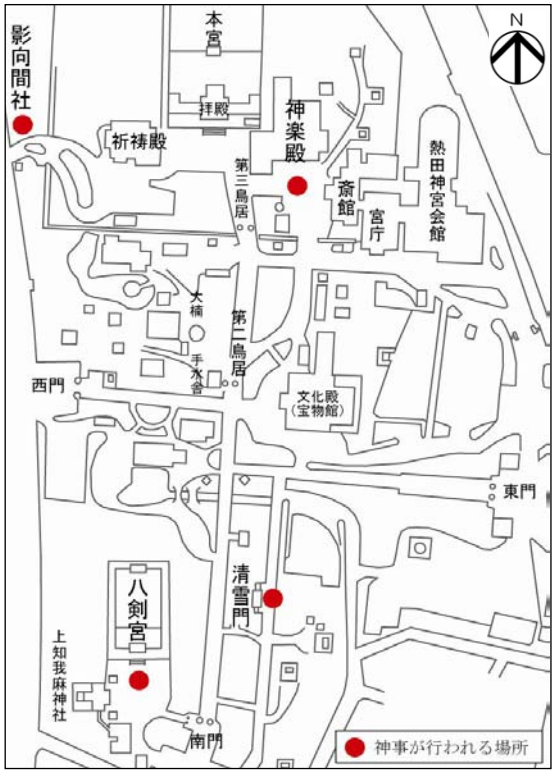

図 2-16 酔笑人神事位置図

神輿渡御神事も酔笑人神事と同じく朱鳥元年（686）の神剣還座の故事に関連する神事で、5月5日に行われている。還座の際の「都を離れ熱田に幸すれど、永く皇居を鎮め守らん」という神託にもとづいて行われている。古くは「神約祭」とも呼ばれていた。『文明十七年（1485）年中行事』の5月5日には「…鎮皇門ニ御幸あり、」の記述がある。戦前は神輿が鎮皇門まで渡御して楼門の上に奉安され、はるかに皇居を望んで祭典が行われていた。鎮皇門は熱田神宮の西門で旧国宝に指定されていたが、戦災で焼失したため、現在は鎮皇門跡への神輿の渡御が行われている。

写真 2-31 鎮皇門（焼失前、当時は国宝）

鎮皇門は、朱鳥元年（686）の創建で、もと天武天皇宸筆の扁額があったが、正応4年（1291）に炎上。後伏見天皇から勅額を賜ったが、慶長初年に再び焼失したという。『続撰清正記』及び腰組枠肘木等の墨書銘によると、慶長5年（1600）に加藤清正が改築し、貞享3年（1686）徳川綱吉が修理を加えている。3間1戸、側面2間の円柱八脚楼門、入母屋造桧皮葺であった。正面には軒唐破風を付し、2間繁棰を施しており、腰の四方の廻縁には高欄をめぐらし、上層の正面中央の間に大華燈窓を開いていた。

写真 2-32 鎮皇門跡（西門）

神輿渡御神事が行われる当日は、午前8時に権宮司以下の祭員が斎館より参進し、祓所において祓を受ける。その後、本宮瑞垣御門内の所定の座につき、奉告祭を執り行う。権宮司が御霊代をうつしたのち、瑞垣御門内から退出して奉告祭を終える。

午前10時、宮司以下の祭員と神幸所役が斎館より参進し、祓所において祓を受けた後、拝殿の所定の座につく。宮司以下の祭員は斎服を、神幸所役は浄衣、褌、東游などを着用している。次いで宮司一拝の後、宮司は神輿の前に進んで祝詞を奏上する。次

写真 2-33 神輿渡御神事の様子

に禰宜が召立文を読み、神幸所役は召立につれて、それぞれ執物を捧持し、前陣、後陣の列次を整える。

続いて発輿となる。行列は表参道を出て国道 19 号線沿いに進んで鎮皇門跡西門に到着する。神輿を中央にすえ、参列者は所定の座につく。ここでは、宮司一拝、献饌、祝詞奏上、神楽、礼拝などが行われる。

鎮皇門跡での神事が終わると、再び行列を整え発輿となる。元の道筋を経て本宮に還御、禰宜の召立文につれて、執物を元の位置に戻し、参列者は所定の座につく。ここで祭儀を行い、神事を終える。

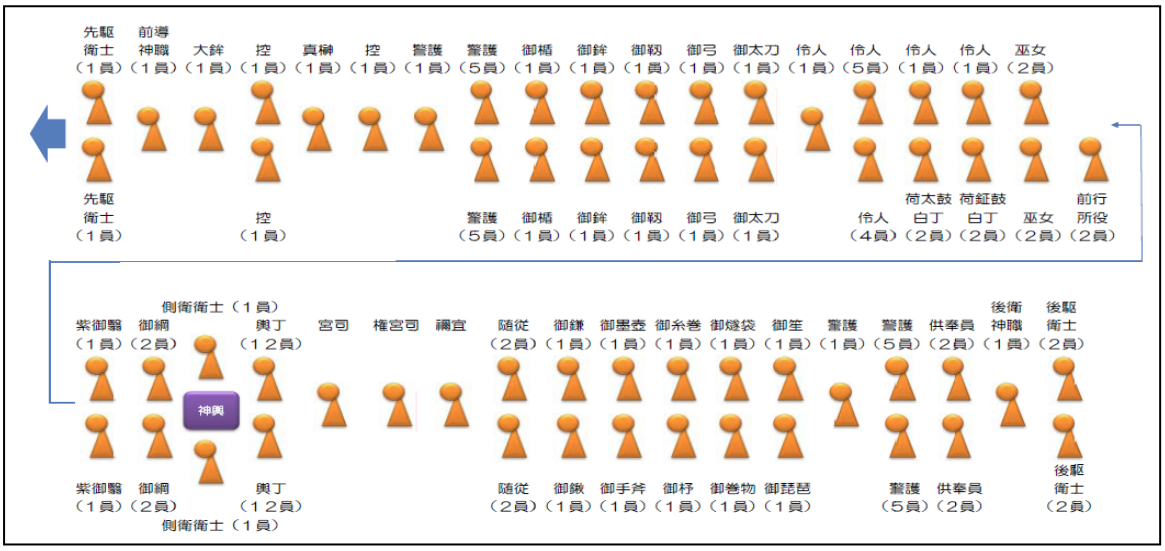

図 2-17 神輿渡御神事の列次

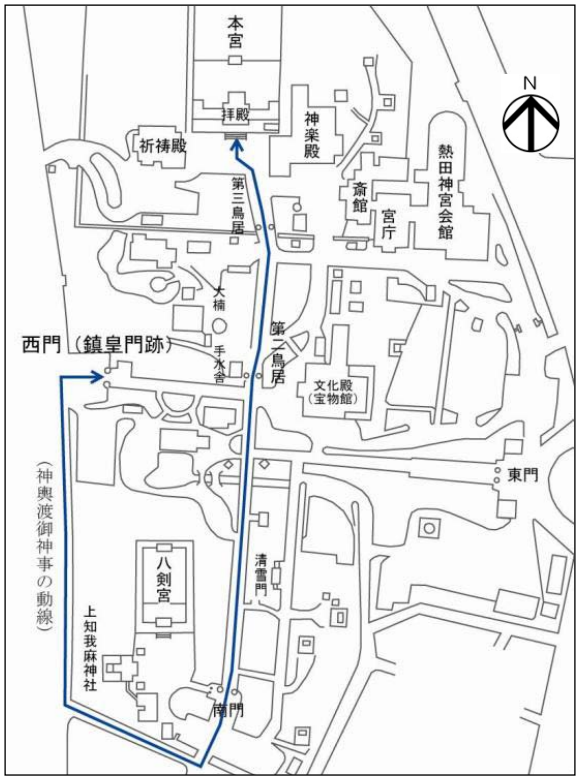

図 2-18 神輿渡御神事の動線図

酔笑人神事と神輿渡御神事は、草薙の剣が還座した故事にちなむ特殊神事であり、酔笑人神事は開かずの門として知られる清雪門などで行われる。これらの神事は、神剣が熱田神宮に還座した喜びを今に伝えたり、往古の神約を今も守り続けたりする熱田神宮ならではの神事として知られている。神の庭ともいうべき熱田の杜に響く神職の笑い声や華やかな神輿渡御の行列は、神秘的かつ神々しいものであり、人々の世代をはるかに越えた年代の重みを感じさせるものである。

イ　例祭（熱田祭）

熱田神宮の例祭は６月５日に行われている。これは、皇居から勅使をお迎えし、御幣物の奉奠、御祭文の奏上が行われる熱田神宮において最も重要かつ荘厳な祭典である。

例祭当日は、午前 10 時に御幣物辛櫃を先頭にして勅使以下、宮司をはじめとする祭員、総代の順に列次を整えて参進する。本宮の石階段下西側の祓所において修祓の後、本宮に参進する。

本殿は御垣内の一番奥に位置する神明造、銅板葺の建物である。その本殿の両側に、「東宝殿」・「西宝殿」がある。この御垣内に内から順に「瑞垣」・「内玉垣」・「外玉垣」の垣があり、それぞれの垣の南正面には神明造の門がある。内玉垣と外玉垣との間の広場を「中重」といい、正面中程に立っているのを中重鳥居という。例祭をはじめ祭典の多くはこの中重で行われる。現在の本殿は、伊勢神宮内宮の古正殿を譲りうけて昭和 30 年（1955）に竣工した社殿を、平成 21 年９月 30 日に修造したものである。

例祭における本宮の祭儀は、開扉、献饌、宮司による祝詞奏上、御幣物の奉奠、勅使による祭文奏上、撤饌、閉扉、拝礼の順に行われる。本宮の祭儀には総代、各界代表、崇敬者代表が参列する。

写真 2-34 例祭の様子

写真 2- 35 熱田祭で奉納される神楽

例祭の行われる６月５日は、古くから南新宮社の祭礼（熱田天王祭）が行われている日であり、昭和 24 年（1949）から例祭もこの日に行われるようになった。現在も熱田神宮の例祭と同日に南新宮社祭が行われている。

南新宮社は熱田神宮の境内にある摂社で、素盞嗚尊を祀り天王社と呼ばれて人々に信仰されてきた神社である。現在は本殿のみが残り、西面している。南新宮社本殿は、一間社流造で、主柱上に舟肘木、庇は連三斗で、妻には虹梁の上に撥束を置く建物である。

写真 2-36 南新宮社本殿

貞享３年（1686）修復の記録がある。

寛政２年（1790）の写しが残る「八ヶ村祭礼之覚」によると、南新宮社の祭礼（熱田天王祭）は、寛弘年間（1004～1012）に疫病が流行したため、天王社の前で疫神を「旗鉾」で祓ったことに由来するという。その後、文明年間（1469～1487）になって、祭りに山車が用いられるようになったという。天王祭に出される山車には、大山と車楽の２種類があった。大山は４段の木組みからなり、高さ 12 間（約 21.6 メートル）にも達したという大きな山車であり、山車の上では人形芸能が行われた。一方、車楽は２階造りの屋根上に屋形を乗せたもので、こちらでは稚児舞が演じられた。熱田では、大山や車楽を所有する八カ町（村）が当番を定め、毎年交替で山車を曳き出していた。

図 2-19 熱田大山祭り『熱田祭典年中行事図会』（江戸後期）

熱田天王祭は、宿場町・湊町として発展した熱田の象徴的な祭りであったが、明治 30 年代になると町に電線が引かれ、形を変えざるを得なくなった。明治 39 年（1906）には、大山や車楽に替わって、熱田の浜に巻藁船（まきわらぶね）が出されるようになった。明治 43 年（1910）からは 5 艘の船が出され、これは昭和 48 年（1973）まで続けられた。この間、大山と車楽のほとんどは戦災で焼失してしまった。その後、巻藁船は陸に上がり、現在は熱田祭の一環として熱田神宮の門前に設置される献灯まきわらにその面影を残している。

現在、献灯まきわらは 5 基が出されている。これらの献灯まきわらを担当する学区と設置場所・数は、白鳥学区が東門に 2 基、船方学区・千年学区が西門に 1 基ずつ、大宝学区が南門に 1 基である。このうち、船方・千年・大宝の各学区は堀川の西側に位置しており、熱田祭に関わる地域は、堀川の西側まで広がっている。献灯まきわらの点灯に従事する人々は、午後 6 時前、参道に列を整え、本殿に参拝して種火を受け取る。その後、各持ち場につき、1 年間の 12 月と 365 日を表す提灯（ちょうちん）に順次灯を入れて、1 時間ほどかけて献灯まきわらを完成させる。提灯に灯がともり、辺りが薄暮から暗闇へと変わるころになると花火を目当てに訪れる人々で境内と熱田神宮周辺は埋め尽くされ、この日一番の賑わいとなる。花火は断夫山古墳のある熱田神宮公園から打ち上げられ、堀川沿岸や白鳥公園などでは、多くの人々が初夏の夜空を彩る花火を見上げる。

写真 2-37 現在の献灯まきわらの様子

例祭では、献灯まきわらや花火以外にも、熱田神楽、尾張新次郎太鼓、棒の手、巻わらみこしなどが奉納されるほか、武道大会、献茶、献花など様々な奉納行事が行われる。これらの奉納行事には名古屋市内はもとより、市外からも多くの人々が参加して行われる。また、地元の白鳥学区、旗屋学区の数十町内からは子ども獅子が出され、次々と熱田神宮の境内に繰り込んで参拝が行われる。

勅使を迎えて行われる例祭は熱田神宮で最も荘厳な行事であるとともに、市民による様々な奉納行事や花火大会が行われ、「尚武祭（しょうぶさい）」「熱田祭」などと呼ばれる市民に身近な祭りでもある。また、熱田祭と同日には、南新宮社本殿で疫病除を願う南新宮社祭が行われている。南新宮社祭は、平安時代以来の歴史をもち、現在の熱田祭の献灯まきわらは、古くから南新宮社祭に民衆が出してきた山車や巻藁船を引き継ぐものである。熱田祭は神事を中心としながらも、民衆の願いや楽しみが同居する行事として多くの人に親しまれている。

ウ　その他境内で行われる主な神事

このほかにも、熱田神宮では年間を通して様々な神事が行われている。

世様神事は、年の初めにあたりその年の豊凶を占う神事である。例年１月７日に行われる。前年の「封水世様神事」（１月 12 日）において、清水を入れて東宝殿の床下に納めた斎甕を大幸田神社の前にすえ、特殊な尺木で水量を図りその水量によって雨量の多少や旱魃の有無を占う。

写真 2-38 世様神事の様子

神事の次第は、当日午後２時、禰宜、雁使、白丁（２人）が斎館より参進して東宝殿の前に並ぶ。続いて白丁が斎甕を運び、大幸田神社の前に至る。斎甕を神前にすえ、禰宜以下が所定の座につく。次いで雁使が斎甕の蓋を取り除き、尺木をとって水量を計り、微声で「減水何分」と称し、減水量を禰宜に伝える。

この間、神事を見守る群衆が大幸田神社の周りに何重もの人垣を作るが、神事をつぶさに見るには前列に位置取らなくてはならない。また、減水量は禰宜にのみ聞こえる声で伝えられ、神事の結果はその場にいても知ることができない。人々は神事の神秘的な様子を見守るのみである。多くの市民は、翌日の新聞報道などで、神事の様子やその結果を知ることになる。

踏歌神事は、年頭に五穀豊穣を祈願し、千秋万歳の祝言を述べ、大地を踏みしめて土地の精霊を鎮め、除厄招福を祈念する行事である。熱田神宮には、文永 7 年（1270）の『踏歌詩』の古写本が伝えられており、神事の始まりはさらに遡ると考えられる。

踏歌神事は、1 月 11 日に、影向間社、本宮、別宮、大幸田神社の順で行われる。神事は、踏歌頌文を読み上げる詩頭（１人）、舞を奏する舞人（４人）、笏拍子に合せて歌う陪従（５人）、笛役（１人）、雁使（１人）で行われる。途中、陪従の１人は高巾子役となり、半球状の特別の冠と面をかぶる。

神事の流れは、宮司が本殿に祝詞を奏上したのち、陪従が笏拍子で催馬楽の「万春楽」を歌う。その間、舞人が１人ずつ出て一拝する。これを三度繰り返す。

次に陪従の「竹川半首」の歌にあわせて舞人は「卯杖の舞」を奏し、ついで「浅花田」の歌にあわせて「扇の舞」を奏する。次に詩頭と高巾子役が前へ出て、詩頭が頌文を

写真 2-39 踏歌神事（扇の舞）の様子

読誦しつつ「カナワサ右」「カナワサ左」と合図すると、高巾子役は右や左を向いて、振り鼓を捧げて数度打ち振う。続いて、陪従の「何そもそも」の歌にあわせて、舞人の参拝があって終了する。周囲の群衆は高巾子役の振り鼓の音を聞いて、この年の豊凶を占う。

当日は、神事用の衣装を身に付けた祭員の行列が境内を移動するため、参拝者の注目を集め、周りには厳かな空気が流れる。この時期は、初詣に訪れる人々も多く、本宮前で行われる神事には参拝者も含めて多くの人々が詰めかけ、伝統的な神事を見守る。

熱田神宮の神楽殿前の広場の一角には、戦災を免れた西楽所（にしがくしょ）がある。西楽所は貞享３年（1686）徳川綱吉によって再建されたもので、もとは東楽所と対になっていたが、東楽所は戦災で焼失した。長さ４間、幅２間、切妻造、桧皮葺の建物で、角柱上に舟肘木をのせ、床板を張る。正面中央２間は蔀戸、両端は連子窓（れんじまど）、その他は板壁である。

写真 2-40 西楽所

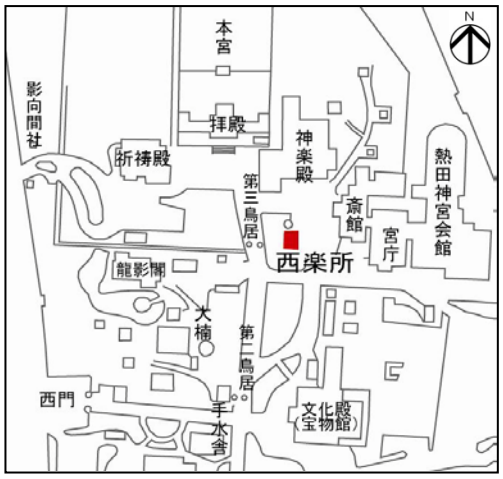

図 2-20 西楽所位置図

歩射神事（ほしゃしんじ）は、西楽所を背景に神楽殿前の広場で行われる神事のひとつである。古来朝廷で行われた新春の歩射の行事にならった豊年と除災とを神に祈る神事で、１月 15 日に行われる。『文明十七年（1485）年中行事』の正月 15 日には「御歩射」の記述があり、この頃には神事が行われていたことが分かる。

写真 2-41 歩射神事の様子

神事当日は午前 10 時からの奉告の儀に続いて午後１時から歩射の儀が行われる。歩射の儀では、小禰宜が神酒をすすめる「酒講の儀」と

魔津星役が大的を祓う「魔津星行事」に続いて「歩射行事」が行われる。

歩射行事では、まず初立射手２人（介添役２人）が進んで射場の所定の位置に至り、矢一手（２本）を交互に射放ち復席する。次いで中立射手２人、後立射手２人の順に同様のことを３回繰り返す。即ち射手１人につき６本、計 36 本を奉射する。この射礼は熱田神宮独自のもので、社伝の古式によっている。

奉射が終わると、射手はそれぞれ宮司の前に進んで三色の幣（絹布）を受け、矢帳役は矢帳を宮司の閲覧に供し、神事を終わる。

最後の矢が射られると、拝観者は一斉に大的を目指して押しかけ、これを奪い合う。大的中央の千木は、古来魔除けの信仰があり、また、戦前は千木をとれば大漁に恵まれるといって熱田の浜の漁民たちが大変な騒ぎを演じていたという。現在も的に殺到した群衆は、中央の千木はもちろんのこと、的の細片まで残さず奪い取る。その様子は大変な迫力であり、見るものを圧倒する。千木を手に入れた参加者はテレビ局などの取材を受け、誇らしそうに応じる。この行事には子どもから高齢者までが参加し、各自のペースで的の一部を引きちぎったり、細片を拾ったりして魔除の縁起物として持ち帰る。歩射神事は、西楽所を背景とした厳粛な神事とその空気を打ち破って進む民衆のエネルギーとが共存する独特な雰囲気の行事である。

写真 2-42 大的を奪い合う群衆

舞楽神事は５月１日に行われる。神楽殿前の広場に舞台が設置され、雅楽は西楽所で奏される。舞楽は、演目に応じて面を付けて舞われるが、熱田神宮には、治承（1177～1181）、弘安（1278～1288）、応永（1394～1428）の修理年紀がある舞楽面が伝えられており、舞楽神事の始まりは平安時代にさかのぼると考えられる。現在、12 面が重要文化財に指定されている。中世にはその伝統が絶えかけたが、３代目尾張藩主綱誠によって、貞享から元禄のころにかけて復興された。明治４年（1871）、旧来の神宮職員一同が罷免されたため、一旦、断絶することになったが、明治７、８年ころ、旧楽家等によって再興がすすめられた。以来、今日に至るまで、神宮職員や神楽の奉賛会である桐竹会会員によって奉仕されている。

神事当日、午前 10 時 30 分に宮司、副従権禰宜１人が斎館より参進し、祓所において祓を受け、本宮中重において祝詞を奏上する。これらが終わると舞台の北方に移動する。この際、副従権禰宜は神前の舞楽目録を捧持し

写真 2-43 舞楽神事の様子

て宮司に従う。これに先立って、半臂装束の楽人２人が舞台の両側北寄りに進み、宮司の参着を待つ。宮司は舞台北方に至ると目録を楽人に授ける。

ここから振鉾に始まり、長慶子に終わる八番の舞楽が順次奉奏される。この番組については、古来 10 組があり、ほぼ同じ演目が 10 年ごとに繰り返されている。

当日は、宮司と副従権禰宜は狩衣、舞楽奉仕員は襲装束、蛮絵装束、裲襠装束などのいわゆる舞楽衣装を着用する。

写真 2-44 豊年祭の様子

豊年祭も西楽所で行われる。世様神事とともに農事に関係のある重要な祭で、俗に「花の撓」、「おためし」などといわれ、５月８日に行われている。神占にもとづき、農作業の風景を農作物や人形の造り物で表した飾り物を神官がつくり、朝８時ころから西楽所で公開する。飾り物には田所と畠所の２場面があり、８日から 13 日まで一般に公開される。当日は境内には苗物、植木、農具、桶、籠などの露店が並ぶ。戦前までは、太平洋戦争で焼失した東楽所に田所を、西楽所に畠所を別々に飾っていた。近在の農業関係者はこの飾り物を見て、農作物全般の作柄を判断して、今年は早生種がよいとか、晩生種がよいとか判断して、農作業の計画をたてる。

熱田神宮の年中行事には、世様神事、歩射神事、豊年祭のような農作物の豊凶を占ったり、豊作・招福・除災などを祈願する神事が多くある。これらの神事には現在も多くの人々が訪れ、歩射神事のように民衆もその一部に参加できる行事もある。神事を見守ったり、そこに参加したりする民衆の様子からは、これらの神事に人々の願いや祈りが込められていることを窺うことができる。また、平安時代にさかのぼるという舞楽神事は、西楽所で奏される雅楽の調べと古式ゆかしい舞振りが王朝絵巻を思い起こさせ、拝観者をみやびな世界へ誘う。

その他本宮で行われる主な祭典・神事

時期	名称
1 月 1 日	歳旦祭
3 月 17 日	御田神社祈年祭（みたじんじゃきねんさい）
5 月 13 日	御衣祭（おんぞさい）
6 月 18 日	御田神社御田植祭（みたじんじゃおたうえさい）
6 月 30 日	大祓（おおはらえ）
10 月 17 日	御田神社新嘗祭（みたじんじゃにいなめさい）
10 月中旬～11 月中	七五三特別祈祷（しちごさんとくべつきとう）
12 月第 3 金曜日	農業感謝祭（のうぎょうかんしゃさい）
12 月 25 日	御煤納神事（おすすおさめしんじ）
12 月 31 日	大祓

（２）熱田神宮ゆかりの古墳・神社に見られる伝統行事

熱田神宮の近くには、断夫山古墳や白鳥古墳といった大型の古墳が残されている。これらの古墳には古くから、熱田神宮創始の神話に登場する宮簀媛命や日本武尊の御墓との伝承がある。また、熱田神宮にゆかりの神社（摂社・末社）は、緑区大高など熱田から離れた地にも祀られている。これらの古墳や神社では今も伝統的な行事が続けられている。

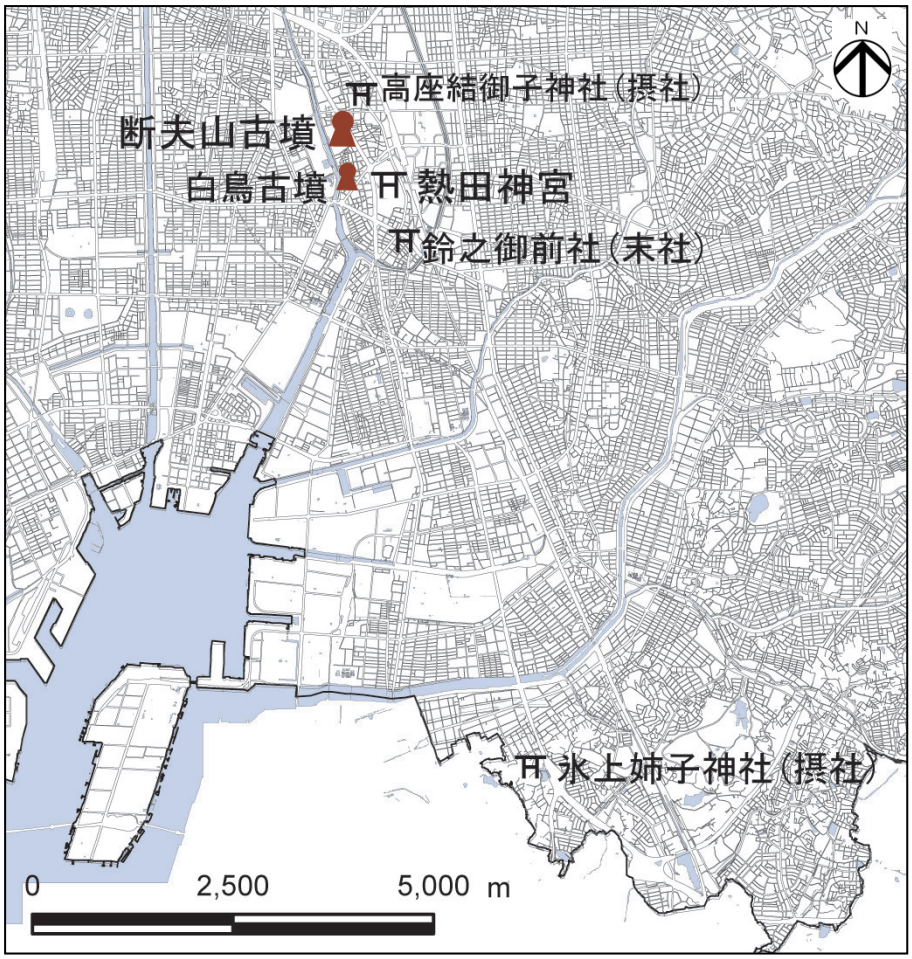

図 2-1 熱田神宮ゆかりの古墳と主な摂社・末社の位置図

断夫山古墳は東海地方最大の大型前方後円墳で、６世紀前半に尾張氏によって築造されたと考えられている。全長は約 150m で同時期の古墳としては、国内第二位の規模を誇り、昭和 52 年（1987）に史跡に指定された。熱田台地西縁に位置し、古墳時代当時は眼下に迫る伊勢湾を見渡す立地であった。古墳の被葬者や詳しい構造は分かっていないが、古墳や残された円筒埴輪の規模などから被葬者は、尾張や美濃にも影響力を持ち、大和王権にも近しい存在であったと推定されている。

断夫山古墳は、古くから熱田神宮創始の神話に登場する「宮簀媛命の御墓」

との伝承がある。古墳への人の立ち入りは禁じられてきたが、かつては毎年３月３日のみ登ることが許されていたという。その様子を描いた、『尾張名所図会』には、古墳に登る人々の奥に伊勢湾が描かれ、台地の縁辺部に築かれた古墳からの旧景を偲ぶことができる。

明治９年（1876）以降、断夫山古墳は熱田神宮の管理下に置かれ、熱田神宮により、「御陵墓祭（ごりょうぼさい）」が行われるようになった。昭和９年（1934）の『熱田神宮年中行事』によると、この頃には断夫山古墳で御陵墓祭が行われていたことが分かる。

現在、御陵墓祭は、熱田神宮の本宮にも祀られている宮簀媛命のゆかりを引き継いで、毎年５月８日に行われている。当日は熱田神宮の神職により古墳前で祝詞の奏上などが行われる。

写真 2-45 断夫山古墳（史跡）

写真 2-46 御陵墓祭の様子

断夫山古墳の南約 400m のところには、白鳥古墳がある。断夫山古墳と同じく熱田台地上に築かれた前方後円墳（全長約 70m）である。『尾張名所図会』には、天保８年（1837）の大風で古墳の一部が崩壊し、多数の副葬品が出土したことが出土遺物の絵図とともに記録されている。白鳥古墳は、日本武尊が死後、白鳥に姿を変えて飛び立った伝説に由来するとされ、熱田神宮では現在も日本武尊の御陵として、断夫山古墳とあわせて御陵墓祭を行っている。

熱田には、断夫山古墳に近接する白鳥古墳、白鳥庭園、白鳥小学校のように、白鳥伝説にちなんだ名称の施設が多く、「白鳥」の呼び名は熱田の地域に定着している。

なお、白鳥庭園は、江戸時代から材木置場として利用されてきた白鳥貯木場の跡地に整備されたもので、堀川対岸の熱田神宮、断夫山古墳、白鳥古墳などの歴史的遺産との調和を意識してつくられた日本庭園である。白鳥庭園横の御陵橋により白鳥古墳と結ばれている。

氷上姉子神社（ひかみあねこじんじゃ）は緑区大高町の氷上山と呼ばれる丘陵地にあり、日本武尊（やまとたけるのみこと）の妃であったとされる宮簀媛命（みやすひめのみこと）が祀られている熱田神宮の摂社である。寛平２年（890）の『尾張国熱田太神宮縁記』には次のような物語が伝わる。

日本武尊は東征に向かう途中、氷上の尾張氏の館を訪れ、そこで宮簀媛命と契りを結んで東国へ旅立った。日本武尊は尾張に戻った後、しばらく宮簀媛命のもとに留まった。日本武尊の死後、宮簀媛命は預かっていた草薙の剣を熱田

の地に移して奉祭した。宮簀媛命の死後、尾張氏の旧里である氷上の地に宮簀媛命を祀る祠が建てられた。これが氷上姉子神社の始まりという。

氷上姉子神社に関する記録としては、『延喜式神名帳』に「氷上姉子神社」、『尾張国本国帳』に「従一位上氷上姉子天神」とある。また、氷上姉子神社周辺には熱田神宮の末社である元宮（もとみや）、神明社、玉根社（たまねしゃ）がある。このうち元宮は、仲哀（ちゅうあい）天皇４年（195）に氷上姉子神社が創設された場所とされている。その後、氷上姉子神社は、持統天皇４年（690）に現在地に遷座されたという。このほか、近くには斎山（いつきやま）古墳があるが、被葬者など詳細は不明である。

現在の本殿は、明治 26 年（1893）に熱田神宮の新造にあたって別宮である八剣宮の本殿を移したものといわれている。一間切妻造で、円柱の床下部は八角形で八角柱上に台輪を組んでその先を延ばし、この台輪上に円柱が立つ。床構造は熱田神宮の土用殿と同じであるが、移築に際して木階（きざはし）や縁（えん）を取り付け、一般社殿のように改造されているようである。

写真 2-47 氷上姉子神社

氷上姉子神社では、太々神楽（だいだいかぐら）や大高斎田（さいでん）での御田植祭（おたうえさい）などの熱田神宮と関係する伝統的な行事が行われている。また、10 月の例大祭は、大高地区の各町内から傘鉾車やお囃子が出され、華やかに行われる。

太々神楽は、江戸時代に熱田神宮で行われていた神楽のひとつであり、天野信景（あまのさだかげ）（1661～1733）の『塩尻（しおじり）』や朝日文左衛門重章（あさひぶんざえもんしげあき）（1674～1718）の『鸚鵡籠中記（おうむろちゅうき）』には、正徳２年（1712）に熱田神宮で太々神楽が始まったことが紹介されている。江戸後期になると、太々神楽は周辺の神社においても独自の講を結成して行われるようになり、明治になると太々神楽は熱田神宮境内では行われなくなった。

氷上姉子神社で太々神楽が始まったのは、天保２年（1831）からと伝えられる。太々神楽に使用される仮面の箱蓋表には、「氷上宮／太々神楽御道具」、その蓋裏には「めんの上主／山森源五／久野彦十／浅井惣兵衛／久野藤四良／丁安政四年（1857）／巳二月吉日」とあり、太鼓の胴には「慶応２年（1886）／丙寅正月吉日」「早川源四郎」と記されていることから、氷上姉子神社の太々神楽は江戸時代末期には盛んに行われていたと考えられる。

写真 2-48 太々神楽

現在、氷上姉子神社の太々神楽は、３月の最終日曜日の午後２時から始められる。神子が拝殿手前の神楽の席、大高町の太々講役員が拝殿内の席に着き、祭主の祝詞奏上の後に太々神楽が行われる。７曲が行われるが、それぞれは非常に短い内容で、全部で 15 分くらいで終了する。太々神楽の行事が終わると各組の役員にお札が渡される。

また、氷上姉子神社に隣接する大高斎田では、６月の第４日曜日の午前 10 時から、御田植祭が行われる。

かつて熱田神宮の斎田は他所にあったが、近代化の中で稲の収穫が困難となり、昭和７年（1932）に大高の現在地に斎田が定められた。以後、熱田神宮に供えられる米はもっぱら当斎田で栽培され、納められている。

『大高町誌』（昭和 40 年（1965））によると大高斎田御田植祭は昭和８年（1933）に始まり、現在まで続けられている。御田植祭では、20 名の男女が揃いの衣装を着て、田植歌に合せて田舞を奉納し田植えが行われる。祭りの装束や田舞は古式ゆかしいもので、この時期の新緑と相まって彩り鮮やかに行われる。

写真 2-49 大高斎田御田植祭の様子

なお、大高斎田での御田植祭に先立ち、６月 18 日には熱田神宮境内の摂社のひとつである御田神社でも御田植祭が行われる。この神事は五穀豊穣を祈るものであり、祭主の祝詞奏上に次いで、陪従の笏拍子に合せて４人の早乙女の優雅な田舞が奉奏される。

写真 2-50 御田神社御田植祭の様子

高座結御子神社も熱田神宮の摂社のひとつである。尾張氏の系譜に名を連ねる高倉下命を祀る。『延喜式神名帳』に記された長い歴史を有する神社である。

境内は昔から高座の森として知られ、本社のほかに熱田神宮の末社である鉾取社、新宮社、御井社、稲荷社が祀られている。本殿は、かつて織田信長も造営をし、蜂須賀家政が修理を加え、貞享３年（1686）に改築した等の記録があるが、戦災により焼失した。現在の本殿は、旧本殿に準じて復興されたもので、昭和 38 年（1963）５月に竣工したものであ

写真 2-51 高座結御子神社

る。

高座結御子神社の例祭は 6 月 1 日に行われる。この地域の夏まつりのはしりであり、地元の旗屋学区、高蔵学区の各町内から獅子が出される。高座結御子神社は、子育ての神としても知られており、境内は「井戸のぞき」で賑わう。井戸のぞきは、境内末社の御井社の井戸を子どもにのぞかせ、その水を戴くと「虫封じ」の霊験があるといわれているものである。

7 月の土用の入りには御井社祭が行われる。また、高座結御子神社では、子どもが 15 歳になるまで神様に預けて無事に成育するようご守護をいただく「子預け」も行われている。

写真 2-52 井戸のぞきの様子

鈴之御前社（れいのみまえしゃ）は熱田神宮の末社で、祭神は天鈿女命（あめのうずめのみこと）である。俗に「鈴の宮」といわれ東海道の旅人が熱田に入る時は、この社で祓を受けてから本宮に詣でることになっていた。

7 月 31 日の例祭には「茅の輪（ちわ）くぐり」の神事が行われる。鈴之御前社の例祭は「夏越（なご）しの祓」として有名で、境内に設けられた大きな茅の輪を左・右・左と八の字にくぐってお参りすると、全ての罪・穢れ・災いから逃れられ、夏病みせずに明るく健やかな生活を営むことができるといわれている。近隣の町内には、あらかじめ紙垂（しで）を付した芦が配られており、当日は夕方になると芦を持った人々が神社に集まって茅の輪くぐりの列を作る。

当社は戦災後、昭和 35 年（1960）に新たに社地を定め遷座された。

写真 2-53 茅の輪くぐりの様子

熱田神宮ゆかりの古墳や神社では、今も伝統的な行事が行われている。断夫山古墳は、熱田神宮創始の神話に登場する宮簀媛命の御墓との伝承から、御陵墓祭が今も熱田神宮によって執り行われている。また、熱田神宮の別宮の古社殿を移築した氷上姉子神社では、かつて神宮で行われていた太々神楽が行われ、神宮にお供えする稲を植える御田植祭が行われるなど熱田神宮との深い関係をもつ営みが続けられている。また、高座結御子神社の「井戸のぞき」や鈴之御前社の「茅の輪くぐり」は子育て・厄除けといった民衆の身近な願いの込められた行事でもあり、多くの人々が訪れる。これらの古墳・神社では、熱田神宮にまつわる神話や地域の歴史に触れることができ、そこで行われる恒例の神事は、厳かな雰囲気や季節感を感じさせるものとして人々に親しまれている。